第二節　学校方針の決定に至るまで

東京美術学校設置の公布以後、小石川植物園内の事務所で開校の準備が進められたが、ここに一つの難関が立ち現れた。それは文相森有礼が岡倉らの設置構想とは別の美術師範学校設置案を打ち出してきたことである。この文相の案文そのものは現存していないので内容の詳細は不明であるが、岡倉のフェノロサ宛書簡（明治二十一年二月八日付）やフェノロサの森有礼宛書簡および金子堅太郎宛書簡（以上『フェノロサ資料Ⅰ』所収）などによれば、美術教員養成を主眼とする構想であり、教育方式は一般教育課程には西洋方式をとり、専門教育課程では日本式と西洋式を並置して、その選択は生徒の自由に任せるという案であったと推測される。また、右記の書簡には文相の提案に外山正一（文科大学学長）が関係していることが記されている。外山は美術に関する論説や活動において岡倉らと対立する立場を表明していたが、森文相は彼の意見を容れて、美術学校には西洋美術と日本美術の両科を置き、どちらが発展するかは自然淘汰に委ねるという方針を示したものと思われる。

新設の美術学校がどのような方針をとるかは世の関心事であり、『絵画叢誌』（第十一巻。明治二十一年二月二十九日）などもこれを大きくとり上げ、「美術学校設立」と題する論説（無記名）を掲げているが、結論としては次のように述べている。

世論ノ紛々タルニ惑ハサル、ヿナク美術學校ニ於テハ東西繪畫ヲ併セ取リ互ニ相混同セズ各々之ヲ教授セバ本邦固有ノ美術ヲ損スルヿナキノミナラズ之ヲ振興スルト與ニ西洋繪畫ノ傳播ヲ見ルベク本邦繪畫モ大ニ進ミ西洋繪畫モ亦練熟スル所アルベク雙美兼ネ収メテ以テ本邦ノ有トナサバ我ガ東洋美術國ノ名ヲシテ益々宇内ニ顯著ナラシムベキナリ

ちなみにこの『絵画叢誌』の発行元は保守派日本画家たちが主導する東洋絵画会である。同会が会則に画学校設立計画を盛り込むなどして教育施設の開設に積極的姿勢を示していたことは既に述べたが、右の論説によれば、官立美術学校が名目上発足した時点での同会の学校構想は東西美術並立主義をとるものであったことがわかる。岡倉はこのような主義を強く批判し、いわゆる「自然発達主義」を主張していた（90頁参照）。

また、『朝野新聞』（明治二十一年二月八日）もこの方針をめぐる議論について次のように報じている。

美術學校　○同校創立の事に關し其の筋にては、さきに御雇米人フェネロサ、文学士岡倉覺三の二氏をして、歐米に航し美術上の景況を視察せしめ、右の二氏は歸朝の後主任となりて、同校教授方法等の事に關し種々取調べ中の由なるが、近來教授の方法に付、日本風を基礎となすべしとの説と、歐米風の實物模寫に倣ふべしとの二説に分れ居る由にて今其の日本風を基礎と

すべしと爲す人の説をきくに、歐米の美術中にも分派頗る多くして恰も日本の美術中に分派多きに異ならず、何れを可、何れを不可となしがたけれ共、西洋の各派は重もに實物の模寫を主とし、東洋の各派は主として風韻雅致を尊ぶに在り、而して又た其の國々に因て多少の差異を生ずるは、勢のまぬがれざる所なり、今ま我邦の美術は歐米の美術に比して劣るなきのみならず反て歐米各派の美術家が夙に賛稱して措かざる所にして、夫の發達の著しきことを以て有名なる佛蘭西派の如きも、漸次實物模寫の風に遠かりて東洋美術に模倣せんとするの傾向あり、又美術に志しある者は喋々東洋の美術就中日本の美術を論じて止まず、此の如く日本美術は西洋人の着目する所となり、佛蘭西派の如きは日本美術に模倣せんとするの傾向ある今日に當て、歐米の風に模はんとするは不可なり、目今歐米美術の有様を見るに、漸次實物模倣をすてて要點のみうつさんとするの傾向ある時なれば、日本はよろしく基礎をその國風に定めおきて、歐米の風を參照すべし、又た我が邦人は一般に美術思想を有する者にて、僅かに膝を入るゝの小屋に住するの車夫等と雖も、花瓶に花卉を挿み愛翫するの風ありて、他邦には多くその比を見ざる所なり、もし此の美風をして倍万盛んならしむるに至らば、夫の富有なるの徒が豪遊之れ事として、時々蠻風を演ずるの醜をまぬがるゝに至らんことも亦た望みなきにあらず、此の望みを達せんとせば、邦人固有の美術思想を發達せしむるにしくはなし、此の一點に就ては双方異論なしと爲し、之れに反對する者は美術を學ばしむるには、最初の二三年は歐米風の實物模倣を學ばしめ、而して後に日本風の美術を教ふるに如かずと爲すに在り、然れども第一説を主張する者は第二説を駁して、若し日本の美術を學ばんとする者に教ゆるに歐米の風を以てせば、勢ひ歐米の風に感染し、又た日本の風をうつす能はざるに至らん、現に我が舊工部大學校美術科生徒の如き、最初教ゆる所の課程は歐米の風なりしを以て、之をして事を爲さしむるも、我が邦人の嗜好に應ずる能はざるは、世人の善く是認する所にあらずやとの言を以てす、夫は兎に角其の筋にては二説中の何れを採るやは未だ確かならざれども、多分第一説を採るならんと云ふ、又同校にては來る九月頃開校する筈にて、生徒七八十名を募集する由なるが、今回は創立の際なれば、入學試驗を爲すにも普通の學力如何は第二に措き、專ら美術思想ありて其の道に心得ある者を採用する筈なりと云ふ。

（『新聞集成明治編年史』第七巻所収）

この記事は一読してフェノロサ、岡倉側に取材したものであることがわかる。「日本風を基礎となすべし」との説がフェノロサらの主張を指すことは言を待たない。「歐米風の實物模寫に倣ふべし」との説とは森有礼側の主張であろう。美術学校の方針は小山正太郎ら洋画派にとっても重大な関心事であり、当然政府に何らかの働きかけをしたに相違なく、そうした意向も森有礼側の設置案には盛り込まれていたものと思われる。

森有礼の提案がフェノロサや岡倉にとって一つの危機であったことは、前述の金子堅太郎宛フェノロサ書簡がよく証明している。そ

こにはフェノロサらが森文相の無理解に絶望して伊藤総理に直接交渉しようとしていることや美術学校は必ずしも文部省と限らず宮内省ないしは農商務省所属でもよいとまで考えていることなど、苦慮のさまが記されている。また、これに関して高屋肖哲は次のように述べている。

明治廿一年二月頃と思ひました、岡倉覺三氏より秋水、肖哲二人を呼び寄せての話しに曰く、明日の談判に破裂せばお互に乞食せんならんと言ひ渡されましたが、此時フエノロサ氏の妻君はある園遊會にて伊藤公に逢ひて美術學校の創立談を説きつけ、芳崖師は伊藤公の邸に到り應接室にて、日本工藝及び東洋美術の話しを充分説いて後ち、工藝及び美術なるものゝ意氣込みは總て斯様なものなりとて、扇子を擴げて仕舞を始め腰部の骨子を見せて講釋し、辭するに臨み、昨夕書きたる話の草稿の手帳を公に渡せしに公は之れを受取りて、ポケットに入れられしと云ふ。是れは創立の際にて力らある話しなりし。是ぞ岡倉氏の心擾したるところです。

（「座談会の後に」高屋肖哲。『東京美術学校校友会月報』第三十巻第一号。昭和六年四月）

岡倉、フェノロサをはじめ事務所関係者一同が危機打開のために奮闘したようである。その手段は伊藤総理への直訴であった。

翌三月に至り、事態は好転し、岡倉らは制度、組織の編成作業を進めた。同月十七日付『東京日日新聞』に、前日の十六日、フェノロサと岡倉が森文相に美術学校組織上の事について上申したことが記されている。森文相との折衝に関する資料は皆無であるから、これは推測に過ぎないが、森文相案をある程度制度や組織に反映させることで決着がついたのではないかと思われる。このような事態好転の要因の一つは肖哲いうところの熱烈な伊藤総理説得活動であろうが、もう一つ見落とすことができないのは時あたかも岡倉らの強力な庇護者である九鬼隆一が宮内省図書頭に就任（同年二月十日）し、岡倉らの美術学校構想と根源を同じくする古美術保護構想の具体化に乗り出したことである。この点については後に述べる。